

『法華経』の現代的意義

M・I・ヴォロビヨヴァ

江口 満訳

まず最初に申し上げたいのは、今日仏教について、『法華経』について語るとき、それが専門家同士であれ、一般向けの話であれ、創価大学と東洋哲学研究所の創立者、池田大作SGI(創価学会インタナショナル)会長の名前を抜きにしては語れない、ということです。現代の仏教啓蒙運動が掲げる目的については、池田氏自身の言葉を引用させて頂くのが一番よいのではないかと思います。

「私共が目指すべきところは、仏教を中心とする東洋の深遠な精神文明をヨーロッパやアメリカ、アフリカなど全世界の人々の根元的な拠り所として、そこから人生の

価値をくみとり、豊かな文化を創造していくことができるようにすることにあります。」

では、ここで仏教の歴史について、二十六世紀を経てなお現代でも生命力を失わない仏教の教義について、『法華経』を通してお話ししたいと思います。

仏教——それは宗教と哲学、道徳、倫理の強力な融合体であり、その世界観は文化や文学によっても広く映し出されています。仏教は偉大な思想家、指導者であるブッダから始まりました。ブッダは人生の奥理を突き止めただけでなく、人間が自分を知り、聡明にしてどんな苦

難をも乗り越えていけるような、自由で主体的な生き方ができるような人間錬磨の道を開きました。

ご存じの通り、仏教の発祥地はインドです。仏教が起こり、広く流布していったのは、仏教が古代インドの祭祀を司っていたバラモンが作り出した社会差別に対抗する民主の潮流として起こってきたことが最大の理由でしょう。バラモンは人と神の仲介役を自ら任じていました。誰も神に直接つながることはできない。その役割はバラモンだけがもつ特権であったわけです。多くの社会的・職業的階層、つまり底辺の階級の人々は神と交流する資格など全くありませんでした。それらの人々は孤立無援で、苦難と困窮に満ちた世界に取り残された存在でした。そこへブッダが救いの手を差し伸べたのです。人々に目標を与え、それを達成する道を指し示したのです。

ブッダが最初の弟子たちに説いたとされる「四諦」(catur-arya-satyani)と「八正道」(astanga-marga)という教えは幾世紀もの歳月を経て、『法華経』におさめられて、今日にも生き続けています。これについてはのちにまた触れることにして、ここで『法華経』が出現した時期と

今も親しまれている『法華経』で説かれた主な教義について、そして『法華経』に至って初めてブッダが弟子に説いた教えについて見ていきたいと思います。

『法華経』が文書として表されたのは一世紀頃のことでした。現在のところ、古代インドの言語であるサンスクリットで書かれた二つのインド版のものが発見されています。(1)ネパール・ギルギット本(ネパールとギルギットで発見)と(2)中央アジア本(東トルキスタンで発見)です。どちらが古いのかは現在まだはっきりしておりませんが、ドイツの学者、ベヘルが立てた説が大方の受け入れるところとなりました。ベヘルは、東トルキスタンで発見された『法華経』の方が二世紀にはもう新しい土地へ伝わり、その地でそのまま保存されてきたのだから、中央アジア本の方が古いと言っています。ネパール・ギルギット本はインドで後に編集されたもので、より後期のものとされており、七世紀を下らないものとされています(一九三〇年代にギルギットで地中に埋もれていた仏教遺跡の中から発見された写本の時代確定による)。一世紀頃にインドで仏典結集がおこなわれた当時のサンスクリットで

書かれた最初の文書は残っていません。極東で最も普及した『法華経』は、五世紀に鳩摩羅什が中国語に訳した『妙法蓮華経』でした。日本で最も広まったのも鳩摩羅什訳です。彼の中国語訳は少なくとも四回、英語に訳されています。その中には日本の学者が訳したものもあり、一九九一年に久保継成氏と湯山明氏によって発表されました。

中国語の写本は、サンスクリットのものとは章の数や分量が違う場合があります。これにはいくつかの理由が考えられるでしょう。まず、鳩摩羅什が中央アジア本を用いたのだろうとは言われているものの、どのサンスクリットの原本を使ったのかがはっきりわかっていません。第二に中国語の訳者は往々にしてサンスクリットの原文から逸脱して、すでに中国で受け入れられている仏教の教義に翻訳を近づけようとしたり、あるいは中国の既成の哲学的表現や用語を使ったりしていました。今日まで残っているサンスクリットの写本について言えば、同じサンスクリットでも違いがみられます。まず、品の数が二十七品のものと二十八品のものがあります(鳩

摩羅什は二十八品。第二に、いくつかの説話について、それがあるものと、ないものがあり、また両写本に特徴的な繰り返しの回数にも違いがあり、中央アジア本は少なくなっています。形容辞の数や、説話に出てくる登場人物にも違いが見られます。どちらのサンスクリットの写本も後に改訂された形跡があり、ところどころ經典のより古い部分である「偈」の部分が、同じ教えを説いている長行と内容が食い違っているところがあります。特にそれが顕著なのは「信解品第四」で、その後半は明らかにあとから加えられたものであることがわかります。『法華経』の加筆がいつどの文化圏でおこなわれたのかを知るための写本研究、翻訳の比較研究は研究者のこれからの課題といえるでしょう。

では『法華経』は何を初期仏教に加えたのでしょうか。「四諦」と「八正道」についてはすでに申し上げました。これはあらゆる時代を通じて仏教の根底部分を貫いています。「四諦」についてはのちほどまたふれることにしましょう。「八正道」は初期仏教の救済論の土台をなしています。これは「教えの道に入った者」「預流果の聖者」

は正しい見解、正しい意志、冒瀆の言葉を用いない正しい言葉、正しい行い、正しい生活、正しい努力、そしてこの六つの行いの結果として正しい気遣い(samyag-santi)、正しい精神集中(samyag-samadhi)が得られるとされています。この正道を歩むと精進の最終段階としてアルハット(阿羅漢。アルハットとは、敵をすべてうち負かした人という意味もある)という境地に到達でき、死後に涅槃に入ることができる、つまり輪廻転生から逃れることができるということです。この道とは高潔な行動規範にのっとっていくことを意味します。その行動規範とは世界のどの宗教にも共通で、時を越えて理解され、受け入れられるものです。それは周りからの応援を一切受けずに自分で自己成長を遂げていくものですが、一方自分の親しい人々の救済には手を貸さないというものでした。これは自己自身の救済道であり、『法華経』の「序品第二」に紹介されています。このような教えは紀元前までの数世紀にわたってインド社会では受け入れられてきましたが、仏教がインドの国境を越えると同時に、すでに仏教に親しんでいた幅広い層にとってはあまり魅力のないも

のとなりました。こうして「一切衆生の救済」をいつ訪れるかわからぬ来世ではなく、今、今世でおこなうという思想が生まれました。しかも、悟りを得たけれども人々への慈悲の心からあえて涅槃に入らずとどまっている菩薩が、救済の道を歩もうとしているあらゆる人々に手を差し伸べるということです。こうして『法華経』は、救いを求める人はだれでも苦しみから解放されることを明記した最初の大乗經典となりました。「葉草喩品第五」では初期仏教である小乗——恐らくここで初めてこの名が使われたでしょう——と大乘との違いが説かれています。小乗は小さな草にたとえられ、大乘は木にたとえられています。とはいえ、ことはそれほど単純ではありません。「譬喩品第三」では散文と韻文で三車火宅の譬喩がでてきます。ブッダはこの譬喩をとおして不幸な人を皆救っていく必要性を説いています。ブッダにとって、小乗の道を歩んでいる人も、大乘の道を歩んでいる人も区別はありません。ブッダはこう言っています。「炎に包まれている人は皆、私の子である。皆、分別がなく、本能に振り回されているのである。私は彼等を三世にわ

たる悪業から救うために三つの車の教えを説こう。この人たちは皆、私の子である。私の本当の子にはこの素晴らしい譬喩を用いて一仏乗 (buddha-yantra) を説こう……。これは宝石のちりばめられた素晴らしい道であり、スガタ (sugata) 善逝——正道を見出した者——に耳を傾ける者は悟りへとこのほりつめてゆく。この譬喩では『法華経』は「ブツダの乗りもの」「仏乗」と呼ばれていますが、これはあらゆる人々を救う乗りものという意味です。救いの道にあっては、求める全ての人々に菩薩がありとあらゆる手助けをしてくれる、ただ肝心なのは、菩薩を見て、菩薩であると知り、菩薩を求めて、菩薩についていくことなのです。

しかしながら、『法華経』と初期仏教との違いはこれだけではありません。もともとインドにあったカルマと輪廻転生の思想を背景に生まれた初期仏教は、本質的には、「人生は苦しみである」からあらゆる欲望を断ち切ることによって生との関わりを断ち、「無」、つまり涅槃に入らなければならないという悲観的な教えです。カルマとは人間にのしかかっている存在であり、三世にわた

って善悪ともに通ずるもので、常に必ず生へ、つまり苦しみへ人間を引き戻す働きであるとしています。カルマは一人一人がこれまでの前世の業をすべてひきずっているもので、今世ではとても乗り越えることはできない、人間は無力でこの世を去って執着をすべて断ち切って初めてこの輪廻の鉄鎖を切れる希望が見えてくる……。そこへ『法華経』が出現して人間をカルマから救い、菩薩を娑婆世界へ送って今世だけでは乗り越えられない宿命から解放し、知恵を得て喜びに包まれる今世へと導いてくれるようになるわけです。ただ菩薩に向かって祈り、助けを求めるだけで、不幸を脱して救われるのです。

それはこの世を苦しみとして生きるのではなく、苦しみを乗り越えて生きていく可能性を照らした光でした。それはいざという時に助けを求めることができ、自らの力を信じることができるという希望でした。だからこそ、『法華経』は現在に至ってもみずみずしさを失わないのです。生活環境は変わり、技術の時代、宇宙の時代を迎えています。すべてが新しい。ただ人間の人生だけは生、老、病、死という変わらぬ法則に従って流れていきます。

『法華経』の力を信じている人はたとえ生活にどんな変化が生じて、人生を苦しみとは思いません。人生がどんな困難や苦しみを人間に与えようと、『法華経』の教えに従っていくならば、恐ろしくもなく、それらを乗り越えていくのです。

『法華経』を一品一品読んでいけば、現代生活の中で役立つ指針に至る所に見つけることができます (今日は日蓮の思想の特色には触れないでおきます。すべての仏教者及び仏教以外の信仰者にとって共通の点だけにとめておきたいと思います)。ただ『法華経』はもちろんですが、どの経典も多かれ少なかれ、三つの段階に分けることができます。すべての人を対象として教義を結論的に説く (俗化する) 段階 (標) と、その教義を仏法哲学の見地から説明をする段階 (釈)、そして精神的・実践的な段階 (結)、つまり自己の心の向上です。以上三つの方向性で、これから『法華経』が私達に教えるものを探っていきましょう。『法華経』はそれ以前の初期仏教の経典と同じく、物質界とその法則をみるのではなく、人間の生命、人間の心で起こっていること、人間の知力の発達や精神的な蘇生、成

長といったことに光を当てています。そこに、『法華経』が二十世紀ものの年月を経てもなおすたれることなく、釈迦の時代と同じように今日にも生きている理由があるように思います。

ではいくつかの品をみていきましょう。

『法華経』の「序品第一」では「八正道」の教えが説かれていることはすでに申し上げました。「八正道」の七番目は正念、正しい気遣いでした。この点を別の観点からみますと、正しい行いをしていくことによって自分の自覚が深まり、つまり、仏道に入っていくことを自覚する、『法華経』の道を歩んでいく覚悟ができていて、ということになると思います。これは今日特に重要なことです。煩雑な日常の渦の中で人々は、確かな方向性を見失ってしまい、結局、何が善で何が悪なのかという感覚も麻痺してしまい、大小さまざまな過ちを容易に犯すようになってしまいます。『法華経』を選択すべきであると悟ることによって、人は最初の一步を踏み出します。次は「八正道」の最後、正定、正しい精神集中です。この概念を正しく理解することは今日、特に重要です。

現代人は現実生活からのがれて人や文明から離れた場所にこもるわけにはいきません。しかし、しばし日常の雑事から離れて『法華経』に思いを巡らせ、ブッダが『法華経』を説き、その名前を繰り返し唱えながら、この経に従いなさい、読み、書写し、弘めて行きなさいと説いている様子を一心に思い浮かべていくべきでしょう。このように經典に向かい、ブッダに向かうことが現代の正定のかたちであり、それは信仰者にとって釈迦の時代から変わらず不可欠のものなのです。

では先にすすみましょう。第二品は「方便品」(Upaya-kausalya)という名です。文字通りに訳せば、衆生に法を説き、帰依させるための方法を考え出せる仏の知恵、ということになります。ブッダは一仏乗を説くのがどれほど難しいか、どのような方法を用いて説くのかを舍利弗に説明します。この品では人々が法を理解するだけでなく、現実の苦悩を乗り越えていくための手助けが必要になってくることが示されます。ここには現代社会が学ぶべき点があると思います。正しく選ばれた救済者、師匠は時に応じて適切な助言を与え、方便(Upaya)を駆使

して生きる道を教えてくれます。それによって、さまざまな問題が人生にかけりをさすことはなくなり、困難を克服すること自体が喜びと自信をもたらします。そして私たちは予期せぬ不幸に遭遇しても心を曇らせたり、嘆いたりしないようになります。なぜならば、誰もが明日にはまた太陽が昇る、新しい日が始まる、自分が笑顔で明日を迎え、人々に心を開いていくならば、周りの人も自分に笑顔を返してくることを知っているからです。

ではここで、「法師品第十」(Dharma-dhauka)も思い出してみたいと思います。ブッダは薬王菩薩を対告衆として「三界」の教えを聞こうとするすべての人々に向かって言います。「一偈一句でも妙法をあかした法華経を聞いた人、ひとときでも歓喜した人は、最高の悟り(anuttarasamyak-sambodhi)を得るだろうと私は授記する。」またブッダは、将来、師の滅後に「一偈一句でも経を聞いた」人も同様であることを約束します。さらに、これは現代にも直接当てはまることですが、「一偈一句でも」この経を信じ、読誦し、ブッダが弟子たちにしたのと同じように深い信と尊敬の念を持って他の人々に説いてい

くならば、過去のすべての仏を讃嘆したことになり、ブッダが再び人々のもとに生まれ、救っていくための素地を作っていくであろうと予言しています。ここから私たち現代人は二つの結論を引き出すことができると思います。第一に、法華経を読み、「一偈一句でも」繰り返し唱えて祈るという皆さんのやっておられる修行もこの部分を根拠としていることになります。『法華経』を何品かでも書写をするのもよいのではないかと思います。書き写すことによって精神を集中させ、理解を深めることができます。第二に、この修行を実践することはすべての過去の仏を讃嘆することであり、そうすることによって未来にも新しい仏たちが出現していく下地をつくることのできるのです。つまり、永遠に人類が救済されているということです。

今度は第七品(Pratyak-siddhi)をみてみることにしましょう。これは「化導の始めについての品」という意味です。鳩摩羅什の中国語訳ではこの品は「化城喻品」となっています。ここでブッダは無量世界から神々と王子たちの呼びかけを聞いて三度、法輪を転じます。これは神々

もバラモンも、誰もできなかったことでした。ブッダはそこで「四諦」を説きます。それは「ここに苦あり。この苦の因あり。苦の滅あり。苦を滅する道あり」というものです。注目していただきたいのですが、ここではインドの写本でも中国語版でも等しくブッダは「人生は苦である」とか、「欲望をなくす」ことが苦を滅する道である、など爾前経のなかで言っていたようなことは言いません。ただ人生には苦があり、その苦を滅する方途があると明言しているのです。これは「四諦」の新たな展開で、現代生活にも当てはめてみるができます。現代の私たちもこの道理を心に刻み、困難な時に思い出せるようにしておきたいものです。ブッダがこの「四諦」を説いた当時の背景や、苦しみから脱する方法も今とは違っていることは、重要ではありません。大事なのは、困難を乗り越えようとする意志そのものなのです。

この同じ品で、ブッダは十二因縁を説いています。この中には先ほど触れました、教義とその哲学的解釈、精神面の標・釈・結という三つの段階がすべて出てきます。

十二因縁とは、様々な条件が重なることによってものごとが成り立っている、ということなのです。ではその様子をみてみましょう。最初に(1)「無明」(avidyā)があり、それが(2)無分別な「行」——行動」(saṃskāra)を起こさせてしまいます。そこに(3)「識——意識」(vijñāna)が働き無分別な行動を正当化しようとして、現実を偽りのゆがんだ形で認識してしまいます。それが(4)「色」、つまり外面的・物質的なもの(rūpa)と「名」、つまり「色」に即した心理状態(nāma)の間違った理解につながり、それが(5)「六入」、六つの感覚器官(sad-śatana)に作用して、(6)誤った「触」つまり接触(sparśa)を通して(7)正しくない「受」つまり感覚(vedanā)を生み、正しくない感覚は(8)「渴愛」つまり妄想(trsa)を抱かせ、(9)「取」つまり執着(upādāna)になり、望みを達することによって(10)新たな「有」輪廻的存在(bhava)を生じ、つまり(11)「生」まれ出て(jāti)、(12)「老」——老い(jarā)と「死」(maraṇa)が近づき、このプロセスは無数の「苦」(duḥkha)が伴います。duḥkhaというのは、苦しみ、不満という意味で、語源的に解釈すれば精神が混

乱した状態のことであり、解脱への妨げとなります。しかし、この連鎖は反対方向にも働きます。「無明」から始まり、つまり周囲の現実を十分に知らないということが、無分別な行動につながるということは(以後の段階もすべてそうですが)、苦しみを消し、内面の自由を獲得するには、まず「無明」つまり、現代生活についての無知を克服しなければなりません。複雑な現代にあつては、誰もが技術にも経済にも強く、政治や医学、芸術、その他生活を成り立たせている無数のことがらに通じていなくてはなりません。ここから「無明」を排除する最も重要な第一歩である教育の必要性が出てきます。日本人々は大変幸運だったと思います。この真実を深く理解しているのが創価大学の創立者であり、東洋哲学研究所、短大、学園の創立者である池田大作先生です。この創価教育を通じて、子どもの頃から何に対してもしっかりと考えて対応できるように、正しい判断をして、社会にあつて物心両面の価値創造を積極的に行い、自分のいるべき場所を見いだせるようになります。この啓蒙の道は仏道においても当てはめられます。仏教の基礎を知ら

ずして『法華経』を理解することはできませんし、理解できないということは『法華経』に助けを求めることもできないということです。古くより仏典の書写をする際に終わりに書写することによって無明を排することができるようブッダに願う旨を書き足す習慣があつたのも偶然ではないでしょう。

ではここで、特に現代にも通ずる『法華経』の二つの品をみてみたいと思います。

まず「見宝塔品第十一」(Stupa-saṃdarśana)です。ここでは釈迦や過去の最も尊敬される仏たちを象徴する宝塔が出てきます。この品では釈迦が神通力を使って七宝でできた巨大な塔を空中に作るのですが、この塔はありとあらゆる色や香り、絹など普通、聖なるものを莊嚴するのに用いられるものが駆使されています。この巨大な塔の出現についてブッダは集まった人々に次のように言います。ブッダは妙法を説きあかしている『法華経』を表したが、七宝でできた宝塔は、その『法華経』のシンボルなのです。そして釈迦の滅後には一切衆生のため救済のシンボルとして残っていくのだ、と。

さて、この宝塔が出てくる部分を三つの角度から見てみたいと思います。

まず最初に表面上の教義的な面からみてみますと、これはあらゆる時代の仏を賛嘆するために、礼拝用の建造物を作る際に人々が持っている物の中から最良のものを集めなさいということになります。

次に一歩深い哲学的な見地から宝塔を考えてみましょう。宝塔は宇宙、ミクロコスモス、マクロコスモスの象徴です。この塔はいくつもの段が重なって上にのびており、それぞれの段が仏法の宇宙観という無数の世界の一つ一つをあらわしています。また、七宝でできているのですが、これも一つの象徴です。『翻訳名義集』によりますと、これは良い行いをあらわしており、良い行いをした結果として低い境涯から高い境涯へといけるのです。このように、宝塔は低きから高きへと上っていく原理の象徴といえるでしょう。

さらに第三段階目です。宝塔は心の蘇生のシンボルであり、精神的成長のシンボルであります。この成長は何を根本としているのでしょうか。それは人間が教育を受

け、人生経験を積み、心を豊かにしていくという大変な内面的努力によるものなのです。では私たちはどこから精神的成長の糧を得るのでしょうか、人間の内面世界を作っている七宝とは何なのでしょう。それは自然との触れ合いであり、文化や芸術、そして仏法思想との触れ合いであり、『法華経』に説かれた悟りです。周りを見渡してみてください。太陽があり、空があり、水や植物の世界、見事な建築、絵画、音楽があります。皆さんの師匠である池田先生が撮影された素晴らしい写真を見て下さい。それは本当の芸術作品であり、自然の持つ魅力が人間の創造的な力を得て、あますところなく映し出されています。こういったものを吸収していくことによって心が豊かになり、境涯を広げることができます。新鮮なものの感じ方をするようになり、周囲の現実の見方が変わります。心の蘇生をして、成長するのです。このことが「見宝塔品第十一」には書かれていますのです。

もう一つ特に触れておきたい品があります。それは「観世音菩薩普門品第二十五」（あるいは二十六）です。この品は中国仏教では独立したものとしてみられています

（中国語で観世音とは「あらゆる響きを観る」という意味です）。今日まで残っている古文書でこの品が一番多く残っていたのは中央アジアと中国でした。この品はすでに七世紀頃から書写されるようになり、独立した経典として広まりました。観世音菩薩に向かって祈り、願えば、即座にかなえられると言われ、この経には特に不思議な力があると書かれてきました。ここで皆さんに七世紀中国の写本の挿し絵をお見せしたいと思います。八の場面に分かれていて、それぞれ、火事や盗賊に襲われている人、処刑されようとしている人を、またたくまに表われた、観世音菩薩が救っている様子が描かれています。この絵自体が多くを語っていると思います。『法華経』を手に取り、「一偈一句でも」唱えるという伝統は幾世紀もの年月を経てきました。法華経の読誦は皆さんも実践されており、釈迦の時代と同じく、今も力があります。

今日、『法華経』二十八品を全部詳しく見て様々な社会環境に生きる現代人との関係を探ることは不可能です。

釈迦の弟子や、その他の当時の人々はいろいろな異な

る境涯にありました。仏教にまだ触れたばかりで、よう

やく「流れの中に入った」ばかりの人もしれば、もう研鑽がかなりすすんでいる人、また教義を深く理解している人もいました。ブッダは自身の啓蒙運動を振り返って、

弟子をながめながら大変興味深いことを言っています。

師匠の姿というのは（ここではブッダ自身ですが）弟子が見るようにしか弟子の目には映らない、つまり、弟子が到達した境涯に應じて見えるのだということです。ブッダの寿命について、百年も生きられなかったという人もいれば、百二十年だという人もいました。また、いや、一劫だ、百劫だ、千劫、無量劫だという人もいます。それぞれの境涯と信仰の度合いによってそれぞれが自分なりにブッダをみているのです。ある人はブッダが涅槃に入つたと聞き、別の人はブッダの前に立っていないながら、ブッダの姿が全く見えていません。皆さんがどうか現代のブッダの姿を見逃さないように願っています。そのため

の助けになるのが『法華経』です。

（M・I・ヴォロビヨヴァ、

ロシア科学アカデミー・東洋学研究所写真室主事）

（訳・えぐちみつる）

（本稿は一九九六年十二月三日に行われた当研究所主催の公開講演会での講演原稿です）